

# 動的な住宅への心得

東洋大学大学院 理工学研究科 建築学専攻 伊藤聡研究室 渡邊雅大

タイムスリップを重ね、自身の生家の過去を編集し続けることで生まれる、パラレルワールドを設計した。

全てが不確定で揺れ動くことを止まない世界で、建築がそのような動的な環境に反応を示し続けるために、建築家が本当にできることは何か。私が行ったのは、「生家の過去 - それとは断絶のない千年続くひとつの集落」という二つの場所と時間を横断し、重ね合わせながら、設計の一手一手を何度も点検し洗練させる行だ。建築が時間を引き入れるためにはまず、時間の力を借りようじゃないかということである。

現在という一点”でしか回答が出せない建築設計において、それ以前と未来を引き受けるための「設計者の心得」を導き出すための試論である。



## ■ 主題 \_ 時間と建築

昨日の絶対が明日はどのようなかわからない不確定な社会において、人にとっては揺れ動く環境に身を投じることがむしろは有意義かもしれない。しかし、「**竣工**」という概念が**一般的な日本において、一度はある固定された状態になることではじめて成立する建築は、そのような動的な環境に身を投じることは困難な事象の端たる前である。**一方で、安易に経済原理を優先させることで、今まで醸成されてきた文脈が簡単に上書きされてしまうこともある。そのような頑固な側面と流動的な側面といった二面性を持つ「建築」が、動的で不確定な環境に対して丁寧に反応し続けるために、設計者にはどのような介入が可能か。

## ■ 射程 \_ 建築が社会の変化に反応を示し続けるために、建築家には本当に何が可能か。

**写真の表は屋根が特徴的な建築物が、今回の設計対象の住宅(仮の生家、以降渡邊家住宅と記載)である。**1960年に建設されたこの住宅は、居住者を変えながら、大きく分けて6回の増改築を経て、現在は二回目の空家期が8年続いている。各増改築の来歴を住宅の現状・母の記憶・祖父の写真から紐解くと、それらはその瞬間の要請に対して、非常に素直な反応を示していた。一方で、目の前の要請に対して誠実すぎる介入方法を採用したがゆえに、現在は放棄されており、動的な環境に対応することの限界を迫っていた。現在のこの家に設計介入を施したとしても、それによって今後もこの住宅が生き続けていくかどうか証明することはできない。**建物が社会の変化に対して丁寧に反応を示し続け、真に生き続けるために、設計者が考えるべきことを考えたい。**



## ■ 渡邊家住宅の軌跡 (設計対象の来歴)

60年の時間を蓄積してきた生家のたどった軌跡をひとつひとつ、紐解いてゆく。祖父が撮影し続けた写真・母の証言・実測した図面をもとに、この住宅の表層から、背後に至るまで、可能な限りの情報を蓄え、このプロジェクトで本当に行うべきことは何かを検討した。

建築概要	
敷地面積	168 m <sup>2</sup>
建築面積	70.5 m <sup>2</sup>
延床面積	94.85 m <sup>2</sup>
用途地域	第一種住居地域 (最大建築率 60% / 容積率 200%)
建築年	1960年
構造	木造・鉄骨造
立地	栃木県鹿沼市朝日町

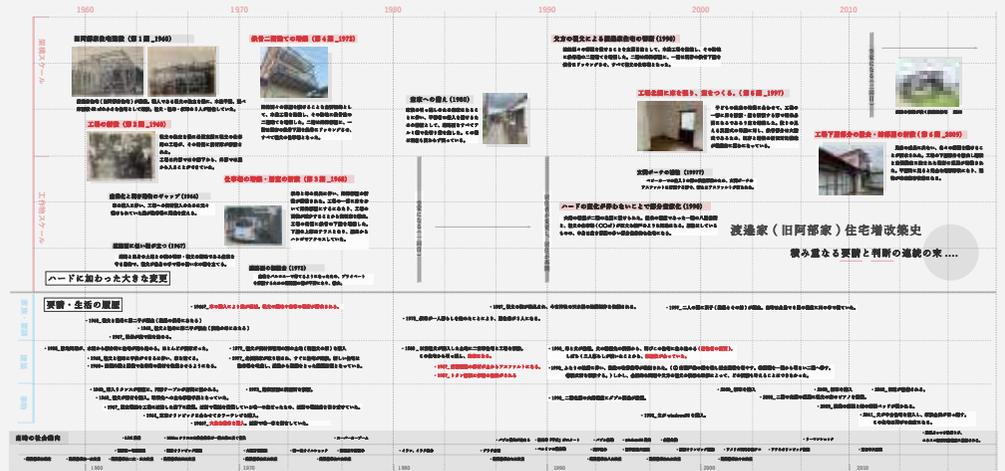


## ■ < 渡邊家住宅 > 増改築史と要請・生活の履歴

この年表では、「実際に渡邊家住宅自身に変更が加わったタイミングとその内容」そして「変化を引き起こしたであろう要請・生活の履歴」の相関関係を図示している。

渡邊家住宅には大きく分けて6回の増改築がなされている。当然ながら、そのどれもが特定の要請が加わることをトリガーとして引き起こっている。その要請は、単に内側から引き起こる居住者側からの要求に起因しているのではない、モータリゼーション化やLDK様式の浸透などの「外側の論理」によるもの、旧来からの敷地周辺環境の特異さ等の「バックグラウンドに潜む論理」によるものも要請の追加を引き起こす因子の一つだ。

一つ一つの増改築と要請を振り合わせて見ていくと、要請が存在するにもかかわらずそれをキャンセルしてハードの変化を引き起こしている瞬間や、強い要請がないにもかかわらず、“一応の措置”として定量的変更が加わっている瞬間が散見される。このプロジェクトでは、それらをもひとつひとつ点検し、変更を加える範囲を精査し、実際の介入を検討していく。





■ 動的な住宅の設計

この計画では、過去に複数回行った数5回のアイジング、そして2021年現在に「自身タイムリープ」し、発生した課題に対して設計者として介入するものとする。

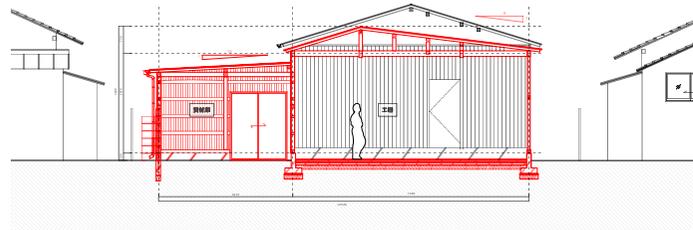
一手目\_エラーを誘起する相互依存状態の構築\_1961年



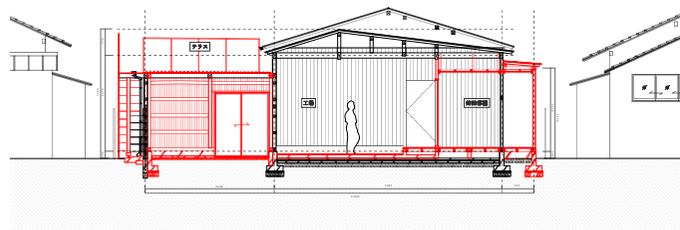
一手目\_エラーを誘起する相互依存状態の構築\_1961年



三手目\_既存文脈への半自立的な依存\_1973年



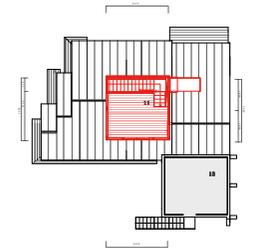
SECTION S:1/50



SECTION S:1/50



1FL SITEPLAN 1:100



2FL PLAN 1:100

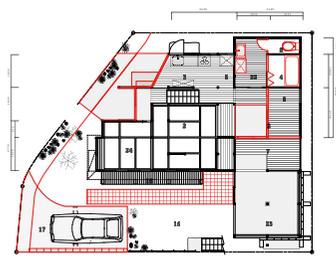
四手目\_見落としていた要因の能動的受け入れ.\_1990年



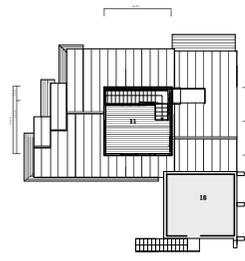
五手目\_通り書を疑い、調律する.\_2010年



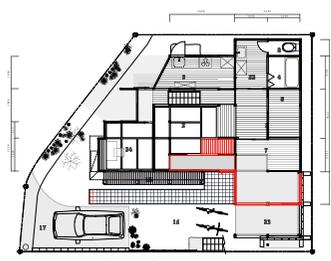
六手目\_異文脈挿入によるエラーの検証.\_2021年



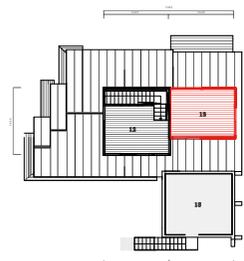
1FL SITEPLAN 1:100



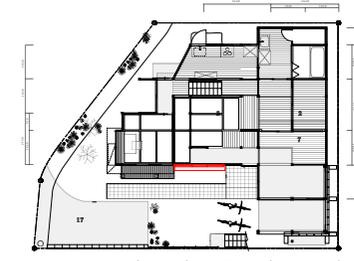
2FL PLAN 1:100



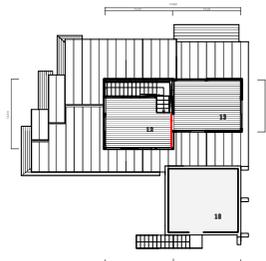
1FL SITEPLAN 1:100



2FL PLAN 1:100



1FL SITEPLAN 1:100



2FL PLAN 1:100

